

# 大学生のレジリエンスと両親の養育態度の関連

藤岡 瑛 神戸学院大学心理学研究科心理学専攻 村山 恭朗 神戸学院大学 心理学部

## The relationship between university student's resilience and parenting attitude of parents

Hinata Fujioka (Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University)

Yasuo Murayama (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)

親の養育態度とレジリエンスの関連に関する国内の研究では、母親のみを取り扱うものが多く、両親の養育態度とレジリエンスの関連を検証している研究は少ない。そこで本研究は、レジリエンスと両親の養育態度の関連を検討することを目的とした。大学生 ( $n=119$  名, 男性 57 名, 女性 62 名,  $20.46 \pm 0.64$  歳) を対象に質問紙調査を行い、両親の養育態度と、生得的な気質に規定されるレジリエンス (以下、資質的レジリエンス) および後天的に獲得されるレジリエンス (以下、獲得的レジリエンス) の関連を検討した。親の養育態度の評価は、調査対象者が小学校高学年から中学・高校生の頃の両親の養育態度を想起する形式で行った。階層的重回帰分析の結果、母親の養育態度と獲得的レジリエンスの間に正の関連を示したが、父親の養育態度と資質的・獲得的レジリエンスとの間には有意な関連は示されなかった。これらの結果から、母親の養育態度が良好だと子どもが感じている場合に、子どものレジリエンスが高まることが示唆される。

キーワード：大学生・レジリエンス・両親の養育態度・ストレス

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2019, Vol.2, No.1, pp.31-36

### 問題と目的

現在、国内では、災害や他の環境によるストレスなどをきっかけに、精神疾患を発症する人が増えている。厚生労働省が3年ごとに全国の医療施設に対して行っている精神疾患の患者調査によると、精神疾患の患者数は2002年には258.4万人であったが、2017年には419.3万人となっている。この統計を踏まえると、精神疾患の患者数は15年間で約1.6倍に増加していることが理解される(厚生労働省, 2011)。このような我が国における精神疾患の患者数の増加の背景には、現代社会に拡大するストレス過多が潜在していると考えられる。

ストレスとは、身体的または心理的に健康な状態を脅かすような事態の総称であり、ストレスとそれに対する反応であるストレス反応によって成り立っている(無藤・森・遠藤・玉瀬, 2018)。ストレスとは、医療や心理学において精神的、身体的にかかる外部からの刺激による負担のことであり、この負担に対して適応しようと精神・身体的に生じたさま

ざまな反応のことをストレス反応という(厚生労働省, 2018)。また、ストレスには、大きく分けて2種類の事象がある。1つ目は、家族の死などのように、人生において発生頻度が低いが重大な出来事であり、2つ目は、職場での人間関係の問題など日常的に生じる些細な出来事である(無藤・森・遠藤・玉瀬, 2018)。

先に述べた通り、我が国では、ストレス過多にある人が増加している。特に、職場などの日常生活で生じるストレスによるものが多いと考えられる。厚生労働省が5年に1回行っている労働者健康状況調査によると、仕事や職業生活でストレスを感じている労働者の割合は、1982年には50.8%であったのが、2007年には58.0%、2012年には60.9%と増加している(厚生労働省, 2012, 2018)。しかし、ストレスを抱えるすべての人が精神疾患を発症するわけではなく、中には日常的にストレスを抱えながらも、ストレスの軽減を図り、心理的、社会的に良好な状態を維持する人が存在することが指摘されている(小塩・中谷・金子・長嶺, 2002)。このような、

心理的、社会的に良好な状態を維持しようとする心理的要因の1つとしてレジリエンスがある（小林・渡辺, 2017）。

レジリエンスとは、逆境に直面しそれを克服し、その経験によって強化される、または変容される許容力を指す（Grotberg, 1999）。一部の研究者は、レジリエンスを複数のパーソナリティ要因によって構成された特性であると考えている（小塩・中谷・金子・長峰, 2002）。その一方で、平野（2010）はレジリエンスを持って生まれた気質に規定されやすい資質的レジリエンス要因（以下、資質的レジリエンス）と、後天的に身につけていきやすいレジリエンス要因（以下、獲得的レジリエンス）に分類している。この定義に沿えば、先天的にレジリエンスが高い人と低い人が存在する一方で、先天的にレジリエンスが低い人であっても、個人の経験や周囲の環境次第により、後天的にレジリエンスが向上すると考えられる。実際、これと合致するように、中高生を対象とした調査では、後天的な個人の発達によってレジリエンスを高められることが報告されている（平野, 2011）。このことから、レジリエンスの向上を促す環境や要因を抽出できれば、予防的介入によってレジリエンスの向上を図ることが可能である。それゆえ、本研究ではレジリエンスの定義として、後天的な要素を含む平野（2010）の定義を用いることにする。

先述した後天的にレジリエンスを高める因子として、WernerとSmith（1982）は安定した家庭環境や親子関係をあげている。これと合致するように、先行研究において、養育行動と子どものレジリエンスの関連が示唆されている。大学生を対象とした研究（浅賀・岩立・松野, 2006）では、子どもが母親と日常的に積極的な交流を保つ場合には、子どものレジリエンスの発達が促進することが報告されている。大学生を対象とした他の先行研究（野津, 2014）では、両親が受容的な養育態度を示した子どもほど、資質的および獲得的レジリエンスが高いことが報告されている。これらの知見から、親の養育行動が適切であるほど、子どものレジリエンスが高いことが示唆される。

以上のことから、親の養育態度が良好であるほど後天的にレジリエンスの発達が促進される可能性がある。しかし、親の養育態度とレジリエンスの関連に関する国内の先行研究では、養育態度を母親のみを取り扱うものが多く、父親と母親の双方の養育行動とレジリエンスの関連を検証している研究はほとんどない。このことから、国内において父親と子どものレジリエンスの関連に関する知見はほとんどないことが理解される。そこで、本研究では大学生を対象として、レジリエンスと両親の養育態度の関連を検討する。

本研究の仮説として、両親から適切な養育を受ける大学生では、後天的に獲得されるレジリエンスが

高くなると考えられる。つまり、父親・母親の養育態度尺度の得点が高い大学生ほど、獲得的レジリエンス得点が高くなると予想する。さらに、両親からの適切な養育態度は、先天的に獲得されるレジリエンスには影響がないと考えられる。つまり、資質的レジリエンスの得点と養育態度尺度の得点に差はないと予想する。

## 方 法

### 調査対象者

神戸市にある私立大学に通う学生 149 名に本調査を実施した。このうち回答に不備のあった 30 名を除いた 119 名（男性 57 名、女性 62 名、 $20.46 \pm 0.64$  歳）を分析対象とした。

### 調査材料

**養育態度** 親の養育態度を評定するために、青年期養育尺度（Development of the Parenting in Adolescence Scale, 内海, 2013, 以下 PAS）を用いた。PAS は 3 下位尺度 15 項目で構成される。下位尺度は相手に受け入れられていると感じる「受容」、相手にコントロールされていると感じる「心理的統制」、興味・関心を向けられていると感じる「モニタリング」で構成される。回答方式は 7 件法（1. 全くあてはまらない—7. 非常にあてはまる）である。本調査では両親の養育態度とレジリエンスを比較することを目的としているため、父子家庭、母子家庭など父親・母親双方について測定できない場合には、調査対象者から除外した。本研究における内的整合性（ $\alpha$  係数）は、母親の PAS において「受容」は .903、「心理的統制」が .616、「モニタリング」が .442、父親の PAS において内的整合性（ $\alpha$  係数）は、「受容」が .902、「心理的統制」が .739、モニタリングの項目が .690 であった。

**レジリエンス** 資質的および獲得的レジリエンスを評定するために、二次元レジリエンス要因尺度（平野, 2015）を用いた。この尺度は 2 下位尺度（「資質的レジリエンス」、「獲得的レジリエンス」）21 項目で構成される。「資質的レジリエンス」は楽観性、統御力、社交性、行動力などの要因を含む、持って生まれた気質に規定されやすいレジリエンスを評定し「どんなことでもたいてい何とかかなりそうな気がする」など、12 項目で構成される。「獲得的レジリエンス」は問題解決力、自己理解、他者心理の理解などの要因を含む後天的に獲得するレジリエンスを評定し、「人の気持ちや、微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ」など、9 項目で構成される。当該尺度の回答方式は 5 件法（1. まったくあてはまらない—5. とてもあてはまる）である。得点が高いほど対象者のレジリエンスが高いことを表す。本研究における

「資質的レジリエンス」の内的整合性( $\alpha$ 係数)は .836, 「獲得的レジリエンス」の内的整合性( $\alpha$ 係数)は .710 であった。

**調査手続き**

本調査は講義時間を利用して実施された。講義終了後の15分程度で本調査が行われ、質問項目の回答後に質問紙を回収した。調査への協力は調査対象者の自由意思に任せられ、個人を特定する情報の回答は求めなかった。親の養育態度についての質問回答の際、調査対象者に対し、小学校高学年から中学・高校生の頃の両親の養育態度を想起してもらいながら、尺度への回答を求めた。

**結 果**

属性(性別と年齢)、両親の養育行動、レジリエンスの関連を検討するために、各変数間の相関係数を算出した(表1)。性別(男性を1, 女性を2としてダミーコード化)と獲得的レジリエンス( $r = -.216, p < .05$ )および母親の「モニタリング」( $r = .218, p < .05$ )との間に有意な相関が見られた。年齢については、母親の「モニタリング」( $r = -.238, p < .01$ )との間に負の相関が見られた。「資質的レジリエンス」と「獲得的レジリエンス」( $r = .494, p < .01$ )、母親の「モニタリング」( $r = .247, p < .01$ )、父親の「受容」( $r = .274, p < .01$ )、父親の「モニタリング」( $r = .352, p < .01$ )に有意な正の相関が見られた。「獲得的レジリエンス」と母親の「受容」( $r = .341, p < .01$ )、母親の「モニタリング」( $r = .315, p < .01$ )に有意な正の相関が見られた。

**レジリエンスの程度を説明する変数**

相関分析では、他の変数の影響を統制できないため、レジリエンスと親の養育態度の関連は疑似相関の可能性がある。このことから、他の変数の影響を統制するため、資質的レジリエンスおよび獲得的レジリエンスを基準変数とする重回帰分析を行った。その際、両親の養育態度の下位尺度と対象者の属性をそれぞれ説明変数に投入した。

分析の結果、獲得的レジリエンスについては、性別は負の関連( $\beta = -.282, p < .01$ :表2)、母親の受容は正の関連( $\beta = .321, p < .05$ )、母親のモニタリングは正の関連( $\beta = .256, p < .05$ )を示した(表2)。他の変数との間には、有意な関連は認められなかった(年齢: $\beta = .022$ , 父親の受容: $\beta = -.227$ , 父親のモニタリング: $\beta = .081$ , 母親の心理的統制: $\beta = -.012$ , 父親の心理的統制: $\beta = -.059$ , いずれも *n.s.*)。資質的レジリエンスについても同様に分析を行ったところ、いずれの変数も有意な関連を示さなかった(性別: $\beta = -.095$ , 年齢: $.172$ , 母親の受容: $\beta = -.017$ , 父親の受容: $\beta = .073$ , 母親のモニタリング: $\beta = .211$ , 父親のモニタリング: $\beta = .246$ , 母親の心理的統制: $\beta = -.017$ , 父親の心理的統制: $\beta = .017$ , いずれも *n.s.*:表3)。

表1

変数の平均値, 標準偏差, および変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	M	SD
1 性別											
2 年齢										20.46	0.64
3 資質的レジリエンス										37.73	8.23
4 獲得的レジリエンス										31.66	5.36
5 母親の受容										30.74	7.94
6 母親の心理的統制										18.22	8.15
7 母親のモニタリング										14.42	4.10
8 父親の受容										27.32	9.06
9 父親の心理的統制										16.98	8.89
10 父親のモニタリング										10.87	4.89

注) \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

表 2  
獲得的レジリエンスを基準変数とした重回帰分析の結果

説明変数	$R^2$	$F$	$\beta$
	.230	4.112 ***	
性別			-.282 **
年齢			.029
受容			
母親			.321 *
父親			-.227
モニタリング			
母親			.256 *
父親			.081
心理的統制			
母親			.035
父親			-.059

注) \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

表 3  
資質的レジリエンスを基準変数とした重回帰分析の結果

説明変数	$R^2$	$F$	$\beta$
	.174	2.899 **	
性別			-.088
年齢			.172
受容			
母親			-.085
父親			.073
モニタリング			
母親			.211
父親			.246
心理的統制			
母親			-.017
父親			.017

注) \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

## 考 察

本研究は、レジリエンスと両親の養育態度の関連を検討するために、大学生を対象として質問紙調査を行った。質問紙調査では、学生の現在のレジリエンスと学生が小学校高学年から中学・高校生の頃に、両親が示していた養育態度について回答を求めた。重回帰分析の結果、獲得的レジリエンスと母親の養育態度の間に関連が認められた。しかし、獲得的レジリエンスと父親の養育態度の間、資質的レジリエンスと両親の養育態度の間に関連は認められなかった。

### 母親の養育態度とレジリエンスとの関連

重回帰分析において、獲得的レジリエンスは、母親のモニタリングおよび受容との間に正の関連を示した。この結果は、過去の養育態度から、母親から興味・関心を向けられていたと評価する学生や、母親から肯定的に受け入れられ尊重されていたと評価する学生ほど後天的に獲得するレジリエンスである

獲得的レジリエンスが高いことを示している。これは、本研究の仮説に沿う結果であるとともに、先行研究を支持するものである。先行研究（浅賀・岩田・松野, 2006）において、子どもと日常的に交流を持つとする母親の子どもほど子どものレジリエンスの発達が促進され、レジリエンスが高まることが示唆されている。他の研究（野津, 2014）においても、母親が受容的で肯定的な養育態度を示す場合には、その子どもは獲得的レジリエンスを高めることが報告されている。これらの先行研究と本研究の結果を踏まえると、幼少期から思春期にかけて母親から日常的に受容され、母親に肯定的に気をかけられていたと評価した学生ほど、獲得的レジリエンスを高めやすいと考えられる。

その一方で、先天的なレジリエンスである資質的レジリエンスと母親の養育態度の下位尺度の間に有意な関連は示されなかった。これは本研究の仮説に沿う結果である。しかし、重回帰分析を用いた先行研究（野津, 2014）は、母親が受容的な養育行動を示すほど、子どもの資質的レジリエンスが高いことが報告されている。本研究と先行研究の不一致の背景を理解することは難しいが、資質的レジリエンスの定義を踏まえると、本研究の結果は資質的レジリエンスの構成概念に則していると思われる。

先述したように、資質的レジリエンスとは、生得的な気質に規定されやすいレジリエンスである（平野, 2010）。この定義を支持するように、大学生と中高生の双生児を対象とした研究において、資質的レジリエンスは遺伝的な影響を受けやすいことが示されている（平野, 2010, 2011）。このことから、本研究で扱った養育態度などの環境要因は、資質的レジリエンスとの関連が弱いと考えられる。その反対に、親の養育態度と資質的レジリエンスとの間に強い関連が認められる場合には、生得的なレジリエンスと定義される資質的レジリエンスの構成概念と一致しないため、平野（2010）が定義するレジリエンスおよびそのレジリエンスを測定する尺度の妥当性が疑われる。これらのことを踏まえると、本研究において、資質的レジリエンスと母親の養育態度の間に関連が認められなかった結果は、平野（2010）が示す資質的レジリエンスの構成概念と一致すると考える。それゆえ、先行研究よりも本研究での結果は妥当であると考えられる。

### 父親の養育態度とレジリエンスとの関連

重回帰分析において、獲得的および資質的レジリエンスと学生が評価した父親の養育態度の下位尺度の間に有意な関連は示されなかった。この結果とは異なり、先行研究（野津, 2014）において、父親が肯定的な養育行動を示すほど、子どものレジリエンスが高いことが認められている。しかしながら、この先行研究では、母親の養育態度と父親の養育態度

は分析モデルに同時に投入されておらず、それぞれ別のモデル内においてレジリエンスとの関連が検討されている。両親がいる家族であれば通常、父親と母親は同一家庭内で生活しているため、父親の養育行動と母親の養育行動は交絡していると考えられる。実際、本研究においても、母親と父親の受容の間には、中程度の相関が認められている（表1参照）。別の先行研究（本保・八重樫，2003）においても、父親が子育てに対して協力的であるほど、母親の子育ての意欲を高めることが報告されている。このことから、父親の養育行動と母親の養育行動は関連していると考えられる。このことを踏まえると、父親と母親の養育態度を個別に分析し、一方の親の養育行動と子どものレジリエンスの関連が示されたとしても、その関連は他方の親の養育行動を介した疑似相関の可能性もある。本研究では、先行研究（野津，2014）とは異なり、両親の養育態度の相互作用を考慮し、父親と母親の養育態度の下位尺度を同時に変数として投入して重回帰分析を行った。そのため、本研究は先行研究と異なる結果が生じたと考えられる。

### 父親・母親の養育態度の差の要因について

本研究の結果を踏まえると、父親よりも母親の養育行動が子どものレジリエンスと関連しやすいと考えられる。具体的には、父親よりも母親の過去の養育行動が良好であったと評価した学生ほど、子どもの獲得的レジリエンスが高まると示唆される。この理由の一つとして、両親間で子どもとの接触時間が異なることがあると思われる。内閣府（2007）が行った調査では、父親の約1%しか平日に子どもと4時間以上触れ合うと回答していないが、母親では約12%がそのように回答している。さらに、中学生を対象とした別の調査（厚生労働省，2001）では、悩みや不安を母親に相談すると回答した中学生の割合が男女ともに一番多いことが報告されている。これらの知見を踏まえると、子どもは父親よりも母親を頼ることが多く、量的・質的にも父親よりも母親との接触が多いことが示されていると考えられる。そのため、本研究では、父親の養育行動と子どもの獲得的レジリエンスの間には関連が認められなかったと思われる。今後の研究において、両親が提供する養育行動の質的な違いが子どものレジリエンスの発達に与える影響について検討する必要がある。

### 研究の限界

まず、本研究の限界として、調査対象者の数に偏りがあることが挙げられる。本研究の調査は一大学の一講義で実施されたため、対象者の考え方や意見に偏りが生じている可能性が考えられる。この対象の偏りが自身のレジリエンスや親の養育態度のデータと関連している恐れもある。このことから、より高い信頼性のあるデータを得るためには、複数の大

学と複数の講義で調査を行うなどの調査手続きを工夫し、検討する必要があると考えられる。

さらに今回、調査対象者に対し、親の養育態度の尺度では、小学校高学年から中学・高校生の頃の両親の養育態度を想起してもらいながら回答を求めた。調査では、想起してもらった期間が小学校高学年から中学・高校生と長く、年齢などを用い、具体的に設定せず曖昧であったため、両親の養育態度の中で、印象が強かった対応のみ覚えていた対象者がいた可能性がある。このことから、今後、中学生や高校生の頃など想起する期間を明確にして調査する必要がある。

また本研究では、調査対象者である大学生が認知する両親の養育態度について回答を求めた。そのため調査の際、想起した養育態度だけでなく、調査対象者が抱く現在の親との関係や親への感情が回答に反映され、両親の養育態度の評価に何らかの偏りが生じた可能性がある。このことから、今後、調査対象者に対し、想起した養育態度と現在の養育態度について回答を求めるなど調査を工夫し、検討する必要があると考えられる。

### 引用文献

- 浅賀 万理江・岩立 志津夫・松野 隆則（2006）. 大学生のレジリエンスと親の養育態度の関連について（ポスター発表A，研究発表）日本教育心理学会総会発表論文集，48，23.
- Grotberg ,E. H. (Ed.) (1999). *Tapping your inner strength: How to find the resilience to deal with anything.* Oakland: New Harbinger Publication.
- 平野 真理（2010）. レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成—パーソナリティ研究，19，94-106.
- 平野 真理（2011）. 中高生における二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の妥当性—双生児法による検討—パーソナリティ研究，20，50-52.
- 平野 真理（2015）. レジリエンスは身につけられるか—個人差に応じた心のサポートのために— 東京大学出版会
- 本保 恭子・八重樫 樫牧子（2003）. 母親の子育て不安と父親の家事・子育て参加との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌，13，1-13.
- 小林 朋子・渡辺 弥生（2017）. ソーシャルスキル・トレーニングが中学生のレジリエンスに与える影響について 教育心理学研究，65，295-304.
- 厚生労働省（2001）. 第13回21世紀出生児縦断調査 Retrieved from [https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/13/dl/h13\\_kekka.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/13/dl/h13_kekka.pdf)（2019年7月28日）
- 厚生労働省（2011）. みんなのメンタルヘルス 精神

- 疾患による患者数 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/data.html> (2019 年 7 月 10 日)
- 厚生労働省 (2012). 労働者健康労働状況調査 Retrieved from [https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/h24-46-50\\_01.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/h24-46-50_01.pdf) (2018 年 5 月 10 日)
- 無藤 隆・森 敏昭・遠藤 由美・玉瀬 耕治 (2018). 心理学 有斐閣
- 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) (2007). 「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」 Retrieved from [https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/tein\\_enrei2/zenbun/index.html](https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/tein_enrei2/zenbun/index.html) (2019 年 7 月 22 日)
- 野津 友美枝 (2014). 父親・母親の養育態度が青年期のレジリエンスに及ぼす関連 京都学園大学 人間文化学部 人間文化学部学生論文集, 13, 27-36.
- 内海 緒香 (2013). 青年期養育尺度 (PAS) の作成 心理学研究, 84, 238-246.
- 小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 - 精神的回復尺度の作成 - カウンセリング研究, 35, 57-65.
- Werner, E. E., & Smith, R. S. (1982). *Vulnerable but invincible: A longitudinal study of resilient children and youth*. New York: McGraw-Hill.

—2019.9.26 受稿 2019.11.15 受理—